

第二の人生は、旅行添乗員。

自分の好きなことで、社会と関わり続けたい



2021年にサントリーを定年退職し、現在は香川県の旅行会社で旅行添乗員として活躍する岩本耕三さん。岩本さんが、66歳から全くの異業種にチャレンジしているのはなぜでしょうか。今回は岩本さんが定年まで勤めていたサントリー四国支社にお越しいただき、これまでの道のりや、人生観・キャリア観を聞きました。

■主体的に創意工夫できる、“やってみなはれ”の風土に育てられた現役時代

— まずは、岩本さんが定年退職するまでのキャリアについて教えてください。もともとは、経験採用で1989年にサントリーへ入社されたそうですね。

はい、そうです。その前はコンピューター機器の営業をしていたので、全くの畑違いからの転職でした。きっかけは、務めていた会社や担当したお客様の関係で、たまたま酒類業界に接点を持つ機会があったこと。新商品発売時の大々的なプロモーションの様子にも触れて、華やかで面白そうだなと思ったんです。

そんなときになんとか転職情報誌を手にとってみると、目に入ったのがサントリーの募集でした。私は関西出身なのでサントリーには親しみもあった。「業界経験がないから多分難しいと思うけど、だめもとで応募してみよう」と履歴書を送ってみたら、意外にも面接に呼ばれて合格したのが全てのはじまりです。

ー 入社後はどのような道のりを歩まれたのでしょうか。

33年間営業一筋でした。初期配属は横浜支店（現：横浜支社）。まだ地域の酒屋さんが元気な時代でもあったので、酒屋への営業が最初の仕事でした。少し慣れてきてからは業務用の酒屋を担当し、横浜の繁華街として有名な桜木町～関内あたりをまわっていたのが当時の思い出です。

その後、広島支店（現：中国支社）に異動。ここが私の最初のターニングポイントですね。私は山口県の防府から下関までのエリアをひとりで担当していたので、卸店、酒屋、業務店、コンビニ…と、あらゆるお客様を担当。人生の大先輩でもあるお客様たちと接しながら勉強させてもらったことが、その後のサントリー人生でも活きています。

広島のアとは、静岡、四国（香川）、名古屋、岡山を経て、2012年に二度目の四国支店（現：四国支社）配属となり、2021年に定年を迎えました。四国支店では高知県を担当。高知はお酒の消費量が全国屈指の地域ですが、ビールではサントリーが苦戦していた地域でした。そこで、なんとか飲んでもらいたいという気持ちで新製品が出る度に一般の小さな酒屋さんを一軒一軒まわっていたのも良い思い出です。泥臭いやり方でしたけど、やっぱり人と人とのつながりは大



取引先だった四万十の老舗料理屋「やまさき」様と。新規オープンの御祝いにかけつけたときの一枚

事。自分のことを好きになってもらえれば、お客様が知り合いを紹介してくれるんですよね。そうやって、少しずつ着実に取引を増やしていくやり方を大切にしてきた記憶があります。

— 33 年を振り返ってみると、岩本さんはサントリーでの仕事にどんなやりがいを感じていましたか。

入社当時から感じていたのですが、前職と比較して明確に違ったことがあるんです。それは、自分で考えて自由に動くことを良しとする文化。役割と目標は与えられるけれど、それをどう達成するかは自分次第。だからこそ達成したときとの満足感や達成感もひとしおでしたし、万が一目標に届かなくても「何が悪かったのか」「次はどうやればいいのか」を考えて、じゃあもう一回やってみようと思ってくれる。「あなたが本当に良いと思うやり方でやってみたらどうだね」と任せしてくれたらからこそ、私は常に仕事に対して主体的でいられたと思います。

■「カレンダーの余白が予定で埋まらない生活」にはしたくなかった

— ここからは、定年前後について聞かせてください。岩本さんは現在もサントリー時代の最後の赴任先である香川県高松市でご家族と暮らしていらっしゃいます。この地に定住するのは既定路線だったのですか。

実は、香川は母の故郷なんです。私自身は神戸出身ですが、両親は引退後に香川に帰っていたんですね。それが名古屋支社時代に母が亡くなり、父ひとりになってしまっ。面倒を見るために会社に希望を出して、ひとまず名古屋から岡山へ異動させてもらい、その後四国支店に異動したという経緯です。だからこの場所は転勤でたまたま訪れた場所というわけでもないんですよ。

— ご自身の定年については、いつごろ意識しはじめましたか。

まだ 60 歳定年だった頃、50 歳を過ぎたあたりからぼんやりと考えるようになりましたね。この後の人生をどうしようかというよりも、やっぱり寂しさが先にありました。仕事が好きだったので、あの達成感を味わえなくなるのか…と。だから、途中で定年が 65 歳に延長されたときは、もう少しサントリーで頑張っても良いんだと言われたようで、嬉しかったですね。しかし、あっという間に時間は過ぎていき、63 歳ごろになっていよいよ定年後を自分事として捉えるようになりました。

— 何か具体的な準備はしましたか。

いえ、定年前から能動的に動いていたわけではないんです。ただ、先にサントリーを引退した先輩からいただいた助言がとても印象的でした。「仕事を辞めたら、カレンダーに向こう1か月の予定を書こうとしてもなかなか埋まらない。白紙のカレンダーを眺める生活は思っていた以上に辛いぞ。そうならないように考えておいた方が良い」と。

その助言は、実際に定年後の1か月をゆっくりと過ごしてみて痛感。このまま働かない生活をずっと続けようとは思いませんでした。社会と関わりを持ち続けないと、自分じゃなくなるような恐怖を感じたんですよね。



取引先だった四万十の料亭「吾妻（あずま）」様の七夕祭りイベントにて。角ハイボール樽を販売していたときの一枚

— 岩本さんは今、旅行会社にお勤めですが、他の選択肢も検討されましたか。

シルバー人材センター経由の仕事やビル管理の仕事など、幅広く検討しました。現役時代はスーパーとのお付き合いもあったので、知見を活かしてスーパーのナイトマネージャーの仕事なんかも良いなと思っていたんですよ。そうした選択肢のうちのひとつが、自分の「好き」を仕事にすること。私は旅行が好きなので、添乗員の仕事ができれば良いなと思っていたんです。

— 再就職はスムーズでしたか。

実際には紆余曲折がありました。私がサントリーを定年した2021年はまだコロナ禍の真っ只中で、旅行需要も非常に低迷していた時期。この時点では旅行の仕事を選択肢から外していたんです。しかし、ハローワークに通っても条件に合う仕事がなかなかみつからなくて…。苦戦しているときに、「やっぱり旅行関係の仕事はないかな」とぼんやりとスマホで検索したところ、ヒットしたのが今の会社。経験もないし年齢も年齢だし、受かる気はしなかったのですが、だめもとで応募してみたら面接に呼ばれて予想外に話が弾み、採用されました。そういえば、だめもとで異業種にチャレンジしているのは、サントリーに転職したときと同じですね（笑）。

■自分なりに考えて動くサントリーの教えが、ゼロからの挑戦を支えてくれた

― 旅行添乗員のお仕事内容や働き方を教えてください。

私が担当しているのは、四国発で全国各地を旅するツアーの添乗です。日帰り旅行から一泊二日くらいのツアーが多いですね。四国からだとは信州方面に良く行きますし、今年のゴールデンウィークはアルペンルートに同行してきました。遠いところだと、クルーズ船で屋久島まで行ったこともあります。当初は月 8 本くらいのペースだったのですが、最近は旅行需要が伸びていることもあって、月 10 本くらいを担当。ツアー前に旅程の確認や下調べも行いますが、それは会社か自宅で行っています。



― 異業種にチャレンジする中で、自分の強みや過去の経験が活かしているなと感じることはありますか。

ツアーに参加される方々は私と同世代か、もう少し上の高齢のお客様が多いんです。ご夫婦・ご友人での参加だけでなく、中にはおひとりで参加されている方も。人との交流や会話を求めて参加されている部分もあるので、同じシニア同士近い目線で話せることや、営業時代にお客様と信頼関係を築いてきた経験は、今の仕事で役に立っていると感じます。

また、怖がらずに何でもやってみようというスタンスでチャレンジできるのは、サントリーの DNA がまだ私の中で息づいているからだと思います。正直、ツアーの内容によっては不慣れなものや苦手意識を感じるものもありますが、それでもまずは取り組んでみる。実際にやってみて苦手意識が克服されることもありますし、担当する中で「もっとこうしたら良いんじゃないか」と気づくことも割とあるんですよ。そうした気づきをもとに自分なりに創意工夫をするのが楽しいですね。添乗員はツアーガイドではないのですが、少しでもお客様に楽しんでほしいからこそ、自分の役割を超えて一歩踏み込んだ観光地の説明をしているこ

とが良くあります。

— サントリーとは異なる環境に身を置くことで、新たに得られたことはありますか。

長く添乗員を続けている先輩たちは、自分とは全く異なる環境でキャリアを築いてきた方々。旅行添乗員は資格が必要な仕事でもあり、この道のプロとしていろんな会社を渡り歩きながら逞しく生きてきた人もいます。世の中にはこんなキャリアの築き方もあったのかと感心させられますし、それぞれのキャリアに優劣はなく、色んな道があって良いんだなと思えるようになりました。

— 今のお仕事では、どんなときにやりがいを感じますか。

ツアーの終わりにお客様とお別れする際に、「今日は楽しかった、ありがとう」と声をかけてもらえたときが一番嬉しいですね。ツアー中はある程度の人数のお客様を引率することになるので、相応のプレッシャーもあるのですが、それが最後のお客様の一言で報われますし、また次回も頑張ろうと思えますね。

■不確かな未来に不安になるよりも、今この時を精一杯楽しむ

— 仕事がない日はどう過ごしていますか。

結婚した子どもの家族が近所に住んでいるので、休日は 8 歳の孫と釣りに出掛けることもありますね。最近孫が学習塾に通い始めたので、そのお迎えを担当するときも。車の運転も好きなので、ひとりで音楽を聞きながら気ままなプチドライブに出かけることもあります。あとは、サントリー時代に得意先だった飲食店に顔を出すことも。担当を離れてもいまだに良いお付き合いが続いていて、私の添乗するツアーに参加いただいたこともあります。

— 仕事で得られる対価は、どのように活用していますか。

サントリー時代に老後の資金を蓄えていたので、現在働いた分で余暇を楽しんでいる感覚です。お小遣いが増えた分は、孫におもちゃを買ってあげたり、ちょっと良いゴルフクラブを買ったり。先日は妻の誕生日だったので、妻のプレゼント代も奮発できました（笑）。

— 岩本さんの再就職について、ご家族の評判を教えてください。

妻は私が働き続けることには肯定も否定もしないスタンスのようです。きつかったら辞め

でも良いし、楽しいなら続ければ良い。私の自由にして良いと言ってくれるからこそ自然体で続けられる気がします。でも、旅行が好きなことや、人と関わるのが好きなことを誰よりも知っているの、「あなたに持ってこいの仕事じゃない？」とは言ってくれますけどね。

ツアーの折り込みチラシには、他の添乗員と共に岩本さんのイラストも掲載されている

— この先の将来についても教えてください。仕事は何歳まで続けたいですか。

今のところは、70歳を節目にしようと思っています。ただ、仕事を引退しても何かしらの形で社会と接点を持つことは続けたいですね。自分ができるだけ長く健康的に生きていくためにも、全く何もしない生活は避けたいです。添乗員としてではなく自分のための旅行にも行きたいですね。近場ですが、中四国エリアにはまだまだ行ってないところがあるので、じっくりとまわってみたいです。

— 岩本さんが大切にしている人生観やモットーを教えてください。

これは母の教えなのですが、今この瞬間を大切にすることです。もちろん、将来についてあれこれ考えて不安になることもあるけれど、未来がどうなるかなんて誰にも分かりません。不確かなことに恐れて何もしないくらいなら、目の前のことに精一杯向き合い、その日その日を楽しく過ごした方が良い。だからこそ、サントリーへの転職も、旅行会社への再就職も、

いただいたご縁を大切に飛び込んでみたんです。

— 最後に現役世代へのアドバイスの意味で教えてください。今の岩本さんが、現役時代の岩本さんに将来を見据えてアドバイスするとしたら、何と言いますか。

今になってやっておけば良かったなと思うのは、ひとつのことを深く突き詰めるようなタイプの経験です。私は営業として広域を担当することが多かったので、仕事のスタイルとしては“広く浅く”が求められていましたし、面に対するアプローチで業績を上げるのが得意でした。けれど、外の世界に出てみると、自分の得意が通用しない場面もあります。社員の意思を尊重してくれるサントリーにいたからこそ、せっかくなら自分で手を挙げて“狭く深く”も経験しておけば良かったと思いました。

そこで得た知識が、将来やりたいことにつながるかどうかは重要ではないんです。何かを極めた、やり切ったという経験は、自分に勇気や自信、向上心をもたらしてくれるはず。サントリーという会社は、そういった経験を応援してくれる環境だからこそ、今の現役のみなさんもぜひチャレンジしてほしいです。

Profile

岩本 耕三さん (いわもと・こうぞう)

寿傘会 関西地区会員

株式会社穴吹トラベル 専属添乗員

大手コンピューターメーカーの営業を経て、1989年にサントリーへ入社。勤続33年の中では、横浜・広島・静岡・名古屋・岡山・四国を経験。2021年に定年退職。現在は旅行会社に再就職し、添乗員業務やツアーの企画業務を行う

*プロフィールは取材当時(24年5月)のものです

(取材・文) 森田大理